



2004 ▶ 2009

## 第4章

# 現状・将来についての意識

### 第1節

#### 現状についての意識

1. 生活満足度
2. 自分自身について

### 第2節

#### 将来についての意識

1. 将来像
2. 結婚後の家事・育児の分担について
3. 将来の職業について(1)
4. 将来の職業について(2)
5. 将来の職業について(3)

第1節

明治学院大学専任講師 元森 絵里子

第2節

1 明治学院大学専任講師 元森 絵里子

2~5 上智大学大学院博士後期課程 谷田川 ルミ

序章

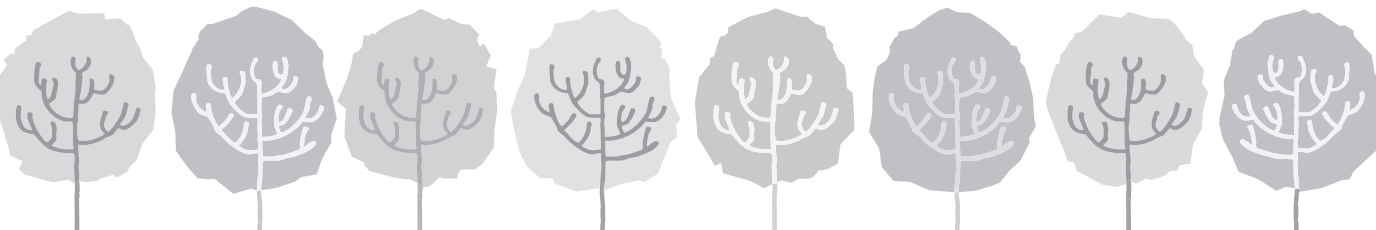
第1章

第2章

第3章

第4章

資料編



## 第1節 現状についての意識

### 1. 生活満足度

2004年に引き続き、身近な人間関係や世界への満足度が高い。自分や社会への満足度は低めであるが、生活満足度は全般的に高まっている。成績別にみたとき、成績下位層が不満をためていることが気にかかる。

#### ◆身近な世界に満足する子どもたち

子どもたちは自分の生活にどの程度満足しているのでしょうか。「あなたは、次のようなことについてどの程度満足していますか」と、身の周りの世界に関する満足度をたずねた結果が図4-1-1である。2004年と比較して、高校生の「自分の性格」を除いたすべての項目で「とても満足している」+「まあ満足している」の割合が増加しており、子どもたちの生活への満足度が高まっていることがわかる。

なかでも、「家族との関係」「友だちとの関係」「学校の先生との関係」「自分が通っている学校」は3分の2以上の子どもが満足しており、身近な人間関係や身近な世界への満足度が高いことがうかがえる。大人への反発や学校への違和感を抱える子どもという像はもう過去のものとなったのかもしれない。

それに対して、「現在の自分の成績」や「自分の性格」への満足度は低く、学校段階が上がるごとに下がっていく。自分についての感度が高まる思春期が関係しているのであろうか。それとも、学年が上がって現実を見つめるということであろうか。

また、「今の日本の社会」への満足度は、2004

年よりは上昇しているものの高くはない。

#### ◆不満をためる成績下位層

2009年の結果を成績（小・中学生）・高校偏差値層（高校生）別にみたのが図4-1-2である。小・中学生では、「今の日本の社会」を除く各項目について、成績上位層に対して下位層のほうが、満足度が低くなっている。成績下位層が「現在の自分の成績」に満足していないのは当然にしても、成績と友だちや家族、地域への満足度が関係しているのである。成績が低いから他がうまくいかないのか、生活が充実していないから成績が悪いのかは一概にはいえないが、「自分の性格」の満足度について、成績上位層と下位層の差が小学生で20.4ポイント、中学生で14.7ポイントもあり、自尊感情に成績が影響を及ぼしているようである。

ただし、高校生では高校偏差値層別で集計すると、進路多様校で、学校や学校の先生、地域、日本の社会への満足度は低いのが、成績への満足度はむしろ高くなっている。偏差値層別に学校が分かれることで、成績への不満は下がるようである。

なお、2004年調査で報告された生活習慣の影響については、7.5～8時間程度の適度な睡眠をとっていたり、適切な食事の習慣を持っていたりするほうが生活満足度が高くなる傾向が引き続きみられる。2009年では、睡眠や食事の習慣

に改善傾向がみられるが、それに応じて生活の満足度も全体的に向上しているといえる。

以下では、いくつかの項目について、それぞれの満足度の背景を探ってみたい。

図4-1-1 生活満足度（学校段階別、経年比較）

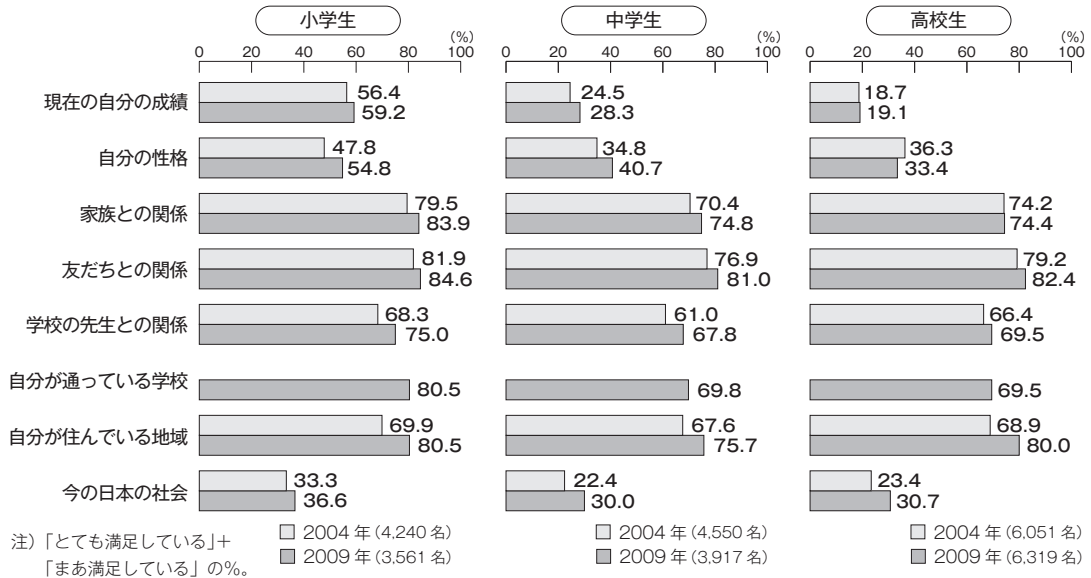
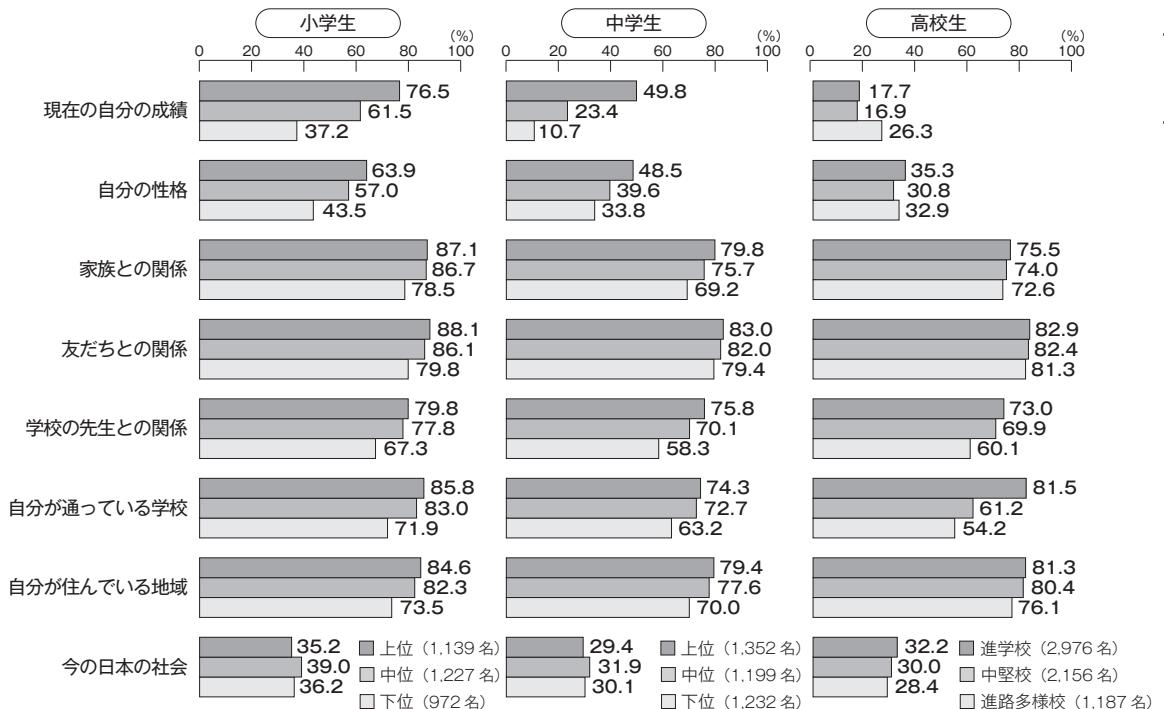


図4-1-2 生活満足度（学校段階別・成績／高校偏差値層別）



## 第4章 現状・将来についての意識

## ◆親子コミュニケーションが満足度を上げる？

まず、どのような家族との関係性が「家族との関係」の満足度を高めているのかをみる。

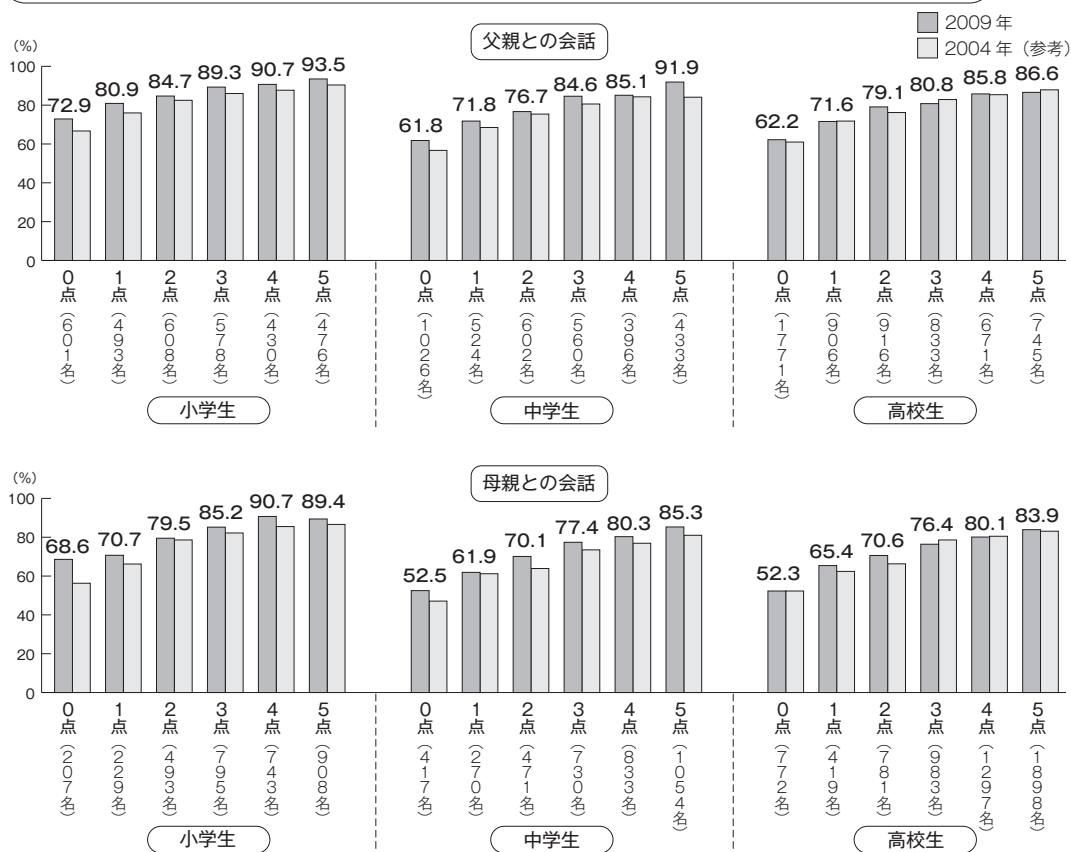
「あなたは次のようなことについて、お父さんやお母さんとどのくらい話をしますか」という設問で、「お父さんとの会話」「お母さんとの会話」それぞれについて、5つの項目（「学校のできごとについて」「勉強や成績のことについて」「将来や進路のことについて」「友だちのことについて」「社会のできごとやニュースについて」）に関する会話の有無をたずねている。父親、母親それぞれについて、「よく話をする」+「ときどき話をする」と答えた項目数を5点満点で点数化し、点数ごとに「家族との関係」に「とても満足している」+「まあ満足している」と答え

た割合を示したのが図4-1-3である。点数が高く親子の会話が多いほど、家族との関係への満足度も高くなっている。

また父親との会話のほうが、会話が少ないうちでも高い場合も満足度が高い。これは父親との会話が少ない家庭が多いなかで、会話が多くの場合はとくに満足するからと考えられる。逆に、母親と会話が少ないうちは、家族との関係の満足度が大幅に下がっている。母親との会話のほうがあるのが当たり前とされていて、少ないと不満をためやすいことがわかる。

ただし、2004年に比べると、会話が少ないうちでも満足度が高くなっている。家族に期待しなくなっているのかもしれないが、いずれにせよ、会話の量が満足度に与える影響が小さくなって

図4-1-3 父母との会話量別にみた「家族との関係」への満足度（学校段階別、経年比較）



注1 「家族との関係」に「とても満足している」+「まあ満足している」の%。

注2 「父親との会話」「母親との会話」は、「学校のできごとについて」「勉強や成績のことについて」「将来や進路のことについて」「友だちのことについて」「社会のできごとやニュースについて」のうち、「よく話をする」または「ときどき話をする」と答えた項目の数を5点満点で点数化した。

注3 図中のサンプル数および%は2009年のもの。

いるとはいえ、過度にコミュニケーションの重要性を強調することはできない。

#### ◆過干渉や矛盾した働きかけは逆効果

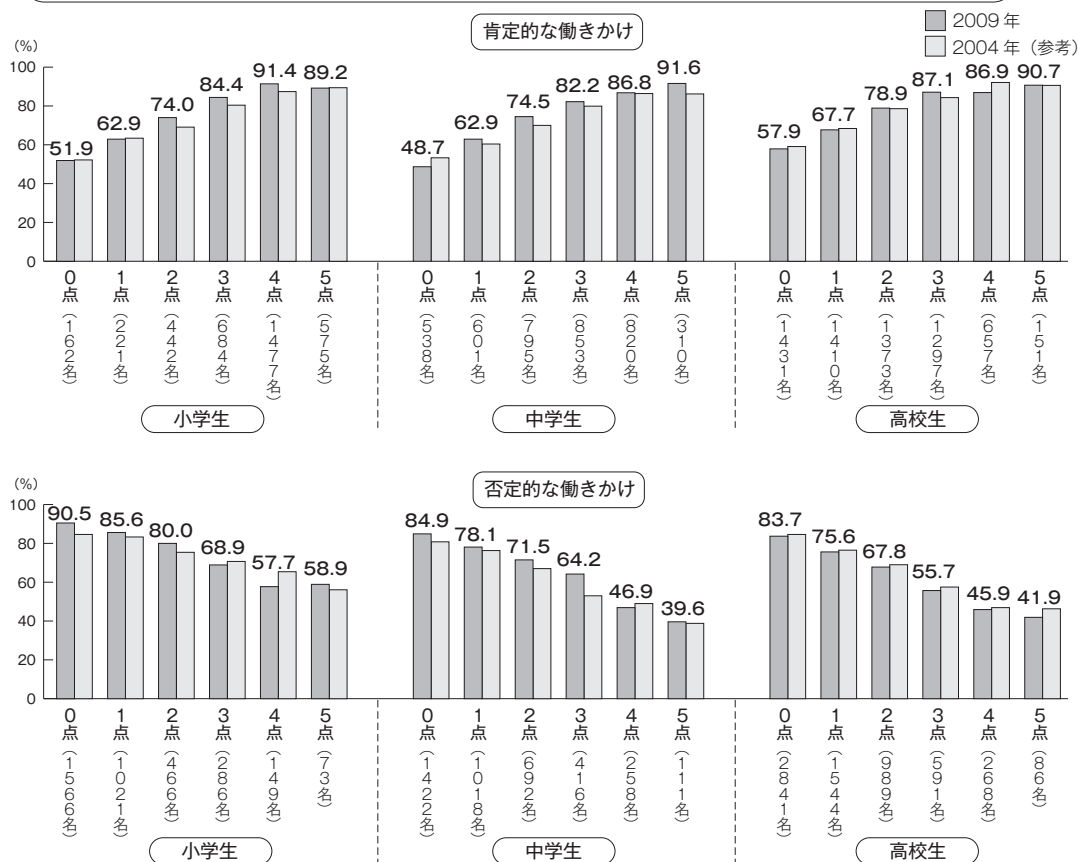
同様に、「親との関係について、次のようなことはあてはまりますか」（複数回答）という設問の回答傾向と「家族との関係」の関係のみたのが図4-1-4である。親の子どもへの肯定的な働きかけを表す「勉強を教えてくれる」「いいことをしたときにほめてくれる」「悪いことをしたときにしかってくれる」「困ったときに相談にのってくれる」「あなたのことを大人として扱ってくれる」と、否定的な働きかけを表す「いつも『勉強しなさい』と言う」「何でもすぐ口出し

をする」「約束したことを守ってくれない」「考えをおしつける」「お父さんとお母さんの意見が違って困る」の選択数を、それぞれ5点満点で点数化している。

親から子どもへの肯定的な働きかけは、多いほど満足度が高い。過干渉や矛盾した働きかけなどの否定的な働きかけは、多くなるほど家族への満足度が低くなっている。やはり、会話の量のみならず、関係性の質も「家族との関係」の満足度に影響しているといえる。

総じて、親子のコミュニケーションが質量ともに良好なほど家族との関係への満足度は高いといえる。

図4-1-4 親とのかかわり量別にみた「家族との関係」への満足度（学校段階別、経年比較）



注1) 「家族との関係」に「とても満足している」+「まあ満足している」の%。

注2) 「肯定的な働きかけ」は、「勉強を教えてくれる」「いいことをしたときにほめてくれる」「悪いことをしたときにしかってくれる」「困ったときに相談にのってくれる」「あなたのことを大人として扱ってくれる」の、「否定的な働きかけ」は、「いつも『勉強しなさい』と言う」「何でもすぐ口出しをする」「約束したことを守ってくれない」「考えをおしつける」「お父さんとお母さんの意見が違って困る」の選択数を5点満点で得点化した。

注3) 図中のサンプル数および%は2009年のもの。

## 第4章 現状・将来についての意識

◆友だちは多いほど満足だが、少なくとも以前ほど不満に思わなくなっている  
次に、友だちとの関係性と「友だちとの関係」への満足度の関係をみよう。

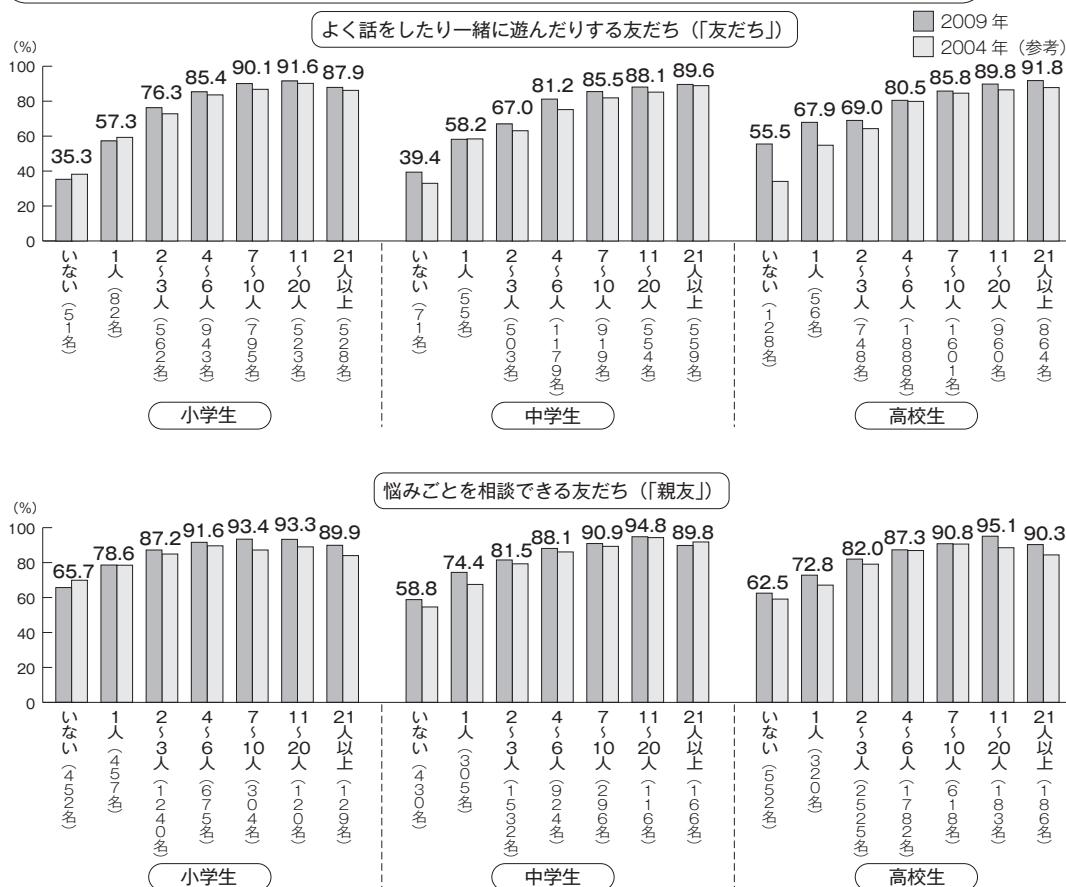
まず、「次のような友だちは、全部で何人くらいいますか」で、「日ごろよく話をしたり一緒に遊んだりする友だち」（「友だち」と呼ぶ）と「悩みごとを相談できる友だち」（「親友」と呼ぶ）の数ごとに、「友だちとの関係」で「とても満足している」+「まあ満足している」と答えた割合を示したのが図4-1-5である。

「友だち」の数は、小学生の「21人以上」を除けば、多いほど友だちへの満足度は高い。「いない」は、小・中学生でとくに「友だちとの関係」への満足度を下げている。「親友」も、「21人以上」と多すぎる場合はやや満足度が下がるものの、多いほど満足度が高い。

2004年と比較すると、小学生は「親友」の「7～10人」「21人以上」の場合、中学生では「友だち」が「いない」「4～6人」や「親友」が「1人」の場合、高校生では「友だち」が「いない」「1人」や「親友」が「1人」「11～20人」「21人以上」の場合に、満足度が5ポイント以上上昇している。とりわけ高校生の「友だち」が「いない」「1人」の場合の満足度の増加は、それぞれ21.3ポイント、13.0ポイントと著しい。

つまり、一方で、「悩みごとを相談できる友だち」が多いほど満足する傾向が強まっている。紙幅の都合で「親友」と表記したが、それは、深く全人的なかかわりをする友人というよりは、分野ごとに気軽に相談できる人を多数確保するといったものなのかもしれない。他方で、「友だち」が少なくとも以前ほど不満に思わなくなっており、友だちへの期待が低くなっている。

図4-1-5 友だちの数別にみた「友だちとの関係」への満足度（学校段階別、経年比較）



注1) 「友だちとの関係」に「とても満足している」+「まあ満足している」の%。

注2) 図中のサンプル数および%は2009年のもの。

## ◆多様な価値観を認め合えると満足度が高い

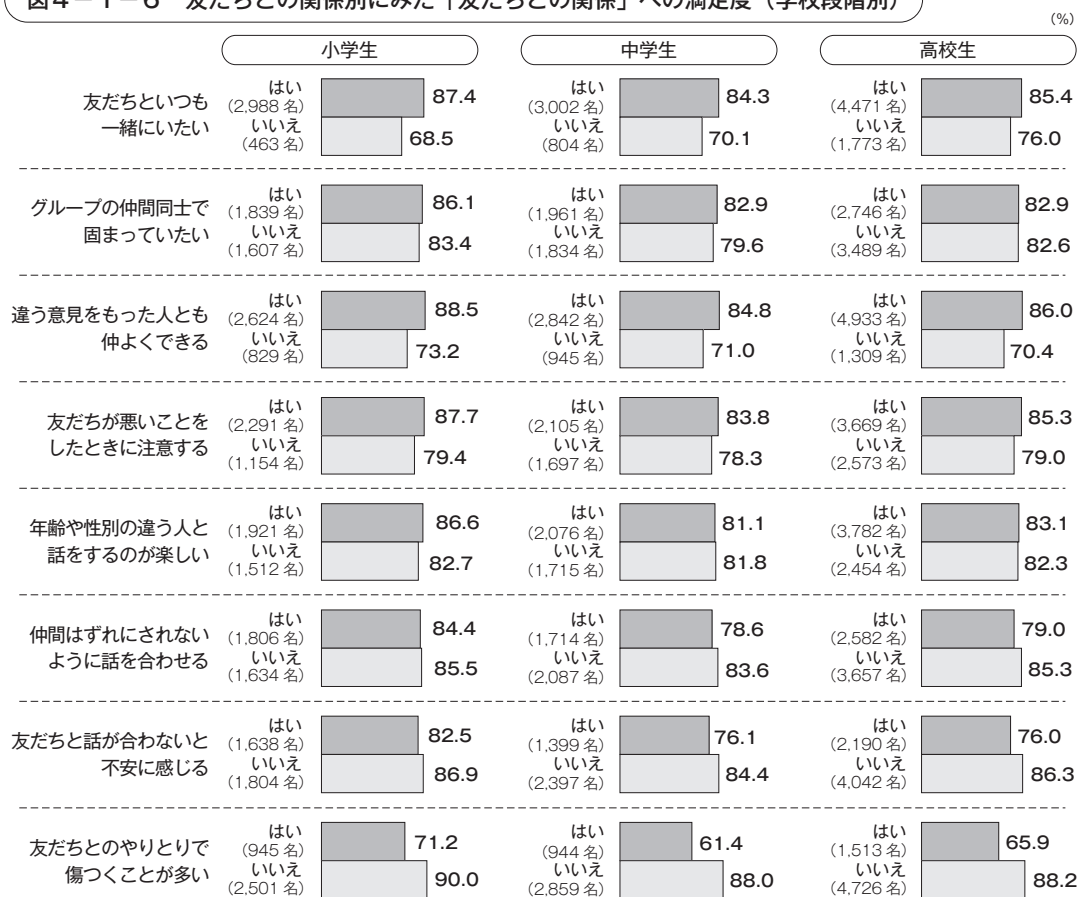
「友だちとの関係について、次のようなことはどのくらいありますか」という設問への回答ごとに、「友だちとの関係」で「とても満足している」+「まあ満足している」と答えた割合を示したのが図4-1-6である。

3ポイント以上差がついているものに注目すると、「友だちといつも一緒にいたい」(小・中・高校生)や「グループの仲間同士で固まっていたい」(中学生)にあてはまるほうが、満足度が高い。友だちと密な接触をすることが重要視されている。さらに、「違う意見をもった人とも仲よくできる」(小・中・高校生)、「友だちが悪いことをしたときに注意する」(小・中・高校生)、「年齢や性別の違う人と話をするのが楽しい」(小学生)にあてはまるほうが、満足度も高い。単に

密だけでなく、多様な価値観を認め合えるほど、友だち関係に満足できるようである。

逆に、「仲間はずれにされないように話を合わせる」(中・高校生)、「友だちと話が合わないと不安を感じる」(小・中・高校生)、「友だちとのやりとりで傷つくことが多い」(小・中・高校生)があてはまる場合は、満足度が低い。密な人間関係志向が、多様性を認め合うほうに向かえばよいが、それが同調圧力に転化すると息苦しさにつながるといえる。近年では、友だち関係は、単純な同調圧力というよりも、空気を読んで「キャラ」がかぶらないようにコミュニケーションするものとなっているとも指摘されており(土井隆義『友だち地獄』筑摩書房、2008)、多様性尊重と仲間はずれへの不安という傾向のゆくえは注視する必要があるだろう。

図4-1-6 友だちとの関係別にみた「友だちとの関係」への満足度(学校段階別)



注1 「友だちとの関係」に「とても満足している」+「まあ満足している」の%。

注2 各項目について、「はい」は「とてもそう」+「まあそう」、「いいえ」は「あまりそうでない」+「ぜんぜんそうでない」とした。

## 第4章 現状・将来についての意識

## ◆地域への満足度は都市生活の利便性による？

ついで、「自分の住んでいる地域」への満足度の要因を考える。そもそも、子どもたちにとって「地域」とは何であろうか。

まず、地域別に「自分が住んでいる地域」への満足度の関係をみたのが表4-1-1である。満足度は、大都市>中都市>郡部の順で減少している。郡部でも満足度は依然高いものの、都市規模の影響がうかがえる。ただ、個別の学校によってだいぶ満足度に差があり、ごく具体的な地域の条件が大きく影響していると思われる。グループインタビューでは、多くの子どもが地域の満足度を測る指標として、駅までの距離や買い物をする場所の有無などをあげていたが、単なる都市規模に加え、より身近な生活の利便性が決め手となっているのかもしれない。

## ◆地域のつながりを感じられると

地域への満足度が上がる？

また、「地域のお祭りやイベントに参加したこと」があるか否かと、「ボランティア活動をする」か否かごとに、「自分が住んでいる地域」への満足度をみたのが表4-1-2である。「地域のお祭りやイベントに参加したこと」はあるほうが多数派であるが、参加したことのない子どもよりも明らかに地域に満足している。「ボランティア活動をする」子どもは少数派であるが、学校段階が上がるほど活動をしないう子どもに比べて地域への満足度が高くなる。

すなわち、インフラ以外にも、人間関係やコミュニティといった視点から地域のつながりを感じていると、住んでいる地域への満足度は高くなるといえそうである。

表4-1-1 「自分が住んでいる地域」への満足度（学校段階別・地域別）

		「自分が住んでいる地域」への満足度 (%)
小学生	大都市 (1,049名)	83.0
	中都市 (1,437名)	79.9
	郡部 (1,075名)	78.6
中学生	大都市 (1,464名)	79.4
	中都市 (1,353名)	73.6
	郡部 (1,100名)	73.1
高校生	大都市 (2,248名)	81.9
	中都市 (1,615名)	79.3
	郡部 (2,456名)	78.7

注)「とても満足している」+「まあ満足している」の%。

表4-1-2 祭り、ボランティアへの参加と「自分が住んでいる地域」への満足度（学校段階別）

			「自分が住んでいる地域」への満足度 (%)
地域のお祭りや イベントへの参加	小学生	なし (553名)	69.3
		あり (2,978名)	82.5
	中学生	なし (518名)	66.0
		あり (3,381名)	77.3
	高校生	なし (957名)	71.7
		あり (5,344名)	81.5
ボランティア活動	小学生	しない (3,135名)	80.1
		する (403名)	82.9
	中学生	しない (3,464名)	75.1
		する (439名)	80.4
	高校生	しない (5,919名)	79.7
		する (390名)	85.9

注1)「とても満足している」+「まあ満足している」の%。

注2)「地域のお祭りやイベントに参加したこと」が「たくさんあった」+「ときどきあった」を「あり」、「あまりなかった」+「ぜんぜんなかった」を「なし」とし、「ボランティア活動をする」が「よくある」+「ときどきある」を「する」、「あまりない」+「ぜんぜんない」を「しない」とした。



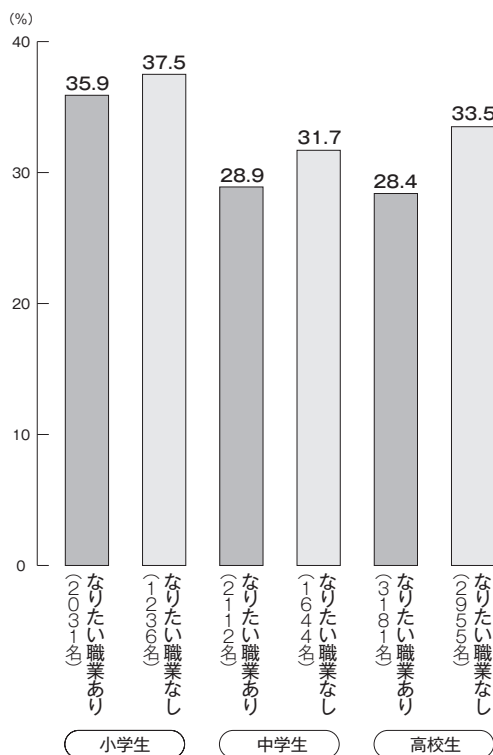
## ◆なりたい職業があると社会の現実を感じる？

先にみたように、身近な生活に比べて、「今の日本の社会」への満足度は高くない。身近な生活に満足しているほど日本社会への満足度も高くなる傾向はあるが、全体としては、「日本社会」は、生活実感とはやや離れたものとして評価されるようである。子どもにとって「日本社会」とは何を意味しているのであろうか。

グループインタビューでは、政治や景気など、メディアを通して触れる社会像が判断理由としてあげられることが多かったが、「新聞の記事を読む」「テレビのニュース番組を見る」かどうかや「社会のできごとやニュースについて」親と話をするかどうかは、「日本社会」への満足度に影響を与えてはいなかった。

そこで、「将来なりたい職業」があるかないか

図4-1-7 なりたい職業の有無別にみた日本社会への満足度(学校段階別)

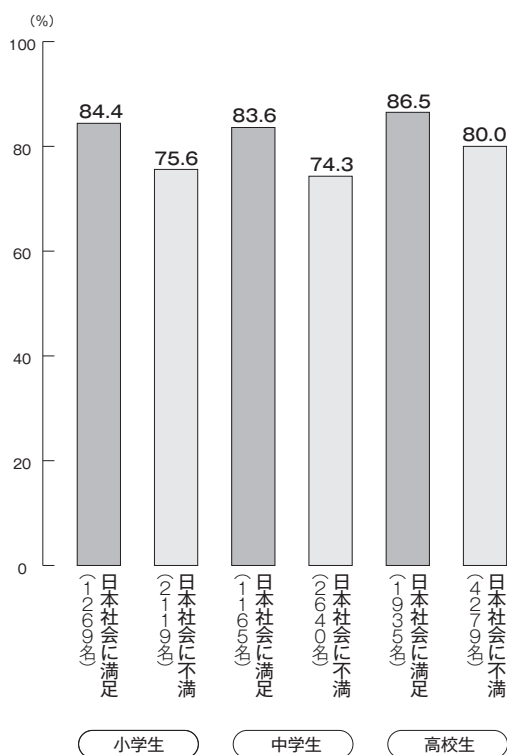


注)「とても満足している」+「まあ満足している」の%。

と「今の日本の社会」への満足度の関係を見たのが図4-1-7である。中学生と高校生ではなりたい職業があるほうが満足度が低くなっており、その差は高校生のほうが広がっている。グループインタビューで、就職を意識したときに昨今の経済状況が気にかかるという意見があったが、データにも同様の傾向が表れている。

ちなみに、「今の日本の社会」に満足しているほど、40歳時に「幸せになっている」と思う割合が高い(図4-1-8)。“現在の日本社会に満足していればいるほど、将来への希望が持てる”といえるが、日本社会への満足度自体が身近な生活感覚とは直結しない「イメージ」に近いものであることに注意する必要がある。そのせいか、学校段階が上がると差が縮まっている。

図4-1-8 日本社会への満足度別にみた40歳時「幸せになっている」と思う割合(学校段階別)



注1) 40歳時「幸せになっている」で「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

注2) 「今の日本の社会」に「とても満足している」+「まあ満足している」を「満足」、「あまり満足していない」+「ぜんぜん満足していない」を「不満」とした。

## 2. 自分自身について

2004年調査に続き、子どもは肯定的に自分をとらえているが、高校生や男子で肯定的なとらえ方が一部減少傾向にある。また、小学生は今尊重されるほど、中・高校生は今不満ですでに大人に混じっているほど、「早く大人になりたい」傾向がある。

### ◆自己像はより肯定的に

子どもは自分自身のことをどのように感じているのであろうか。自己像や情緒に関する設問の回答傾向が図4-1-9である。

大きな傾向は2004年と変わらず、「自分のことは、できるだけ自分でするようにしている」「やる気になれば、どんなことでもできる」「きまりやルールをきちんと守るほうだ」「好きで、熱中していることがある」「ねばり強く最後まで続けるほうだ」など、まじめで自分に対して肯定的な像を持つ子どもが多い。さらに、「やる気になれば、どんなことでもできる」(小学生)、「きまりやルールをきちんと守るほうだ」(小・高校生)、「好きで、熱中していることがある」(小・高校生)、「いやなことがあっても、すぐに忘れる」(中・高校生)、「運がよい」(高校生)が3ポイント以上増加しており、全体的には自己像はさらに肯定的でまじめになっている。逆に、否定的な自己像である「カッとなりやすい」は中・高校生で3ポイント以上下がっている。全体的には、2004年の傾向がより進んだといえよう。

ただ、「自分の外見(顔やスタイル)が気になる」が小学生で32ポイント増えており、外見を意識する傾向の低年齢化が進んでいる。また、高校生で、「やる気になれば、どんなことでもできる」が41ポイント下がり、「つかれやすい」が5.9ポイント上がっており、自己効力感を得られず疲労している様子なのも気にかかる。なお、「早く大人になりたい」が未だ半数以下であるものの、各学校段階で6ポイント以上増加してい

るのも2009年の特徴である。この点は後で検討する。

### ◆マイペースでのんきな男子、 しっかり者で気疲れする女子

2009年調査の回答傾向を、男女ごとにみたのが表4-1-3である。5ポイント以上差があるものに不等号をつけた。

女子のほうが多いのは、「きまりやルールをきちんと守るほうだ」(小・中学生)、「つかれやすい」(中学生)、「カッとなりやすい」(小・高校生)、「早く大人になりたい」(小学生)、「自分の外見(顔やスタイル)が気になる」(小・中・高校生)、「つまらないことですぐに落ち込む」(中・高校生)である。女子はまじめな一方、外見を気にしたり、すぐ落ち込んだりと周囲に気をつかう傾向がみられる(ただし、「カッとなりやすい」は、女子は男子以上に改善傾向にある)。

それに対して、男子のほうが多いのは、「好きで、熱中していることがある」(高校生)、「ねばり強く最後まで続けるほうだ」(小学生)、「いやなことがあっても、すぐに忘れる」(小・中・高校生)、「運がよい」(小・中・高校生)である。男子のほうがよくよく考えずに好きなことをやり、マイペースのようである。

### ◆女子化する男子？

ただ、2004年と比較した場合、「つかれやすい」が、小・中学生で女子は減少したのに対して男子は増加しており、高校生でも男女とも上昇し

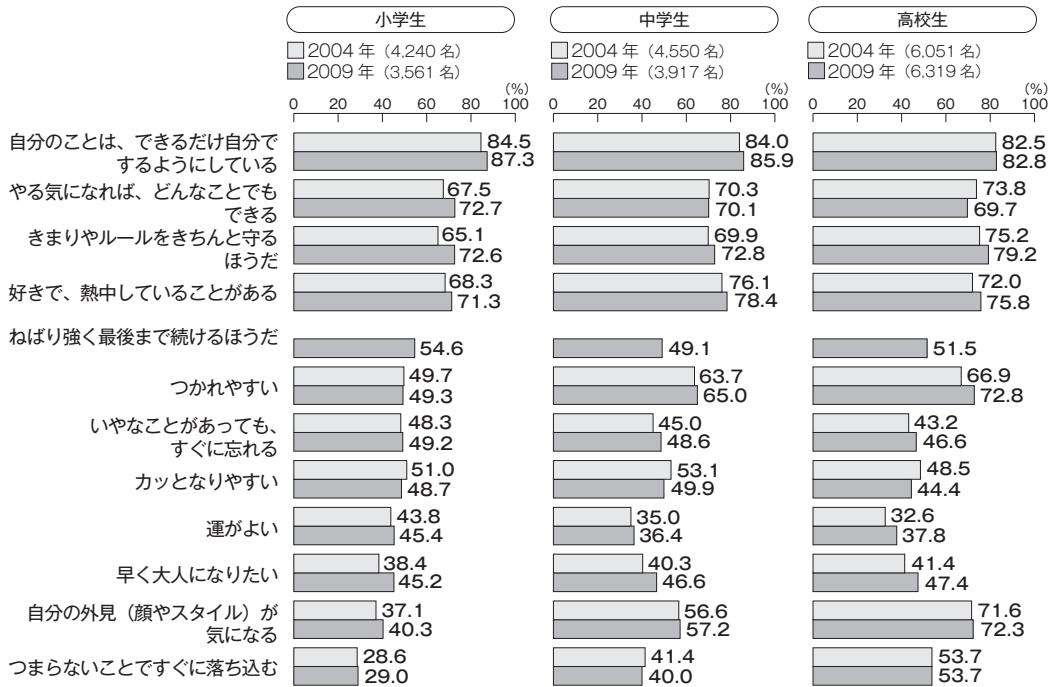
ているが男子の上昇が著しい（男子：小学生2004年46.8%→2009年48.2%（以下同）、中学生57.2%→61.9%、高校生62.2%→71.4%、女子：小学生53.0%→50.5%、中学生70.3%→68.3%、高校生72.0%→74.4%）。

また、「自分の外見（顔やスタイル）が気になる」で、小学生は男女とも増加しているが、中・高校生では、女子は減少または変化なしにもか

かわらず、男子がわずかに増加している（男子：小学生24.6%→28.0%、中学生41.4%→44.4%、高校生61.4%→62.6%、女子：小学生50.4%→53.1%、中学生71.8%→70.8%、高校生82.8%→82.8%）。

男子がマイペースでいられなくなり、さまざまなことに気をつかうようになってきているのかもしれない。

図4-1-9 自分自身について（学校段階別、経年比較）



注) 「とてもそう」+「まあそう」の%。

表4-1-3 自分自身について（学校段階別、性別）

	小学生		中学生		高校生	
	男子 (1,814名)	女子 (1,745名)	男子 (2,012名)	女子 (1,896名)	男子 (3,306名)	女子 (3,005名)
自分のことは、できるだけ自分でするようにしている	85.6	89.1	85.5	86.4	84.0	81.6
やる気になれば、どんなことでもできる	71.6	74.0	69.2	71.0	68.6	70.9
きまりやルールをきちんと守るほうだ	66.5	79.0	69.5	76.4	77.0	81.8
好きで、熱中していることがある	73.2	69.3	79.2	77.8	78.3	73.2
ねばり強く最後まで続けるほうだ	57.6	51.6	50.0	48.2	51.0	52.1
つかれやすい	48.2	50.5	61.9	68.3	71.4	74.4
いやなことがあっても、すぐに忘れる	53.7	44.5	52.8	43.9	49.6	43.4
カッとなりやすい	45.2	52.2	47.6	52.2	42.0	47.0
運がよい	50.3	40.1	40.7	31.6	41.1	34.3
早く大人になりたい	41.8	48.8	44.3	48.9	48.3	46.4
自分の外見（顔やスタイル）が気になる	28.0	53.1	44.4	70.8	62.6	82.8
つまらないことですぐに落ち込む	28.1	30.0	33.0	47.6	48.3	59.8

注1) 「とてもそう」+「まあそう」の%。

注2) <>は5ポイント以上、<<>>は10ポイント以上差があることを示す。

## ◆今がよいから大人になりたい小学生、

## 今が不満だから大人になりたい中・高校生

ここからは、「早く大人になりたい」に注目したい。どういう子どもが大人になりたがるのであろうか。まず、現在の生活の満足度との関係から探ってみたのが図4-1-10である。小学生と中・高校生で様子が違っている。

3ポイント以上差がついているものに注目すれば、小学生は、「自分の性格」や「今の日本の社会」に満足し、「学校の先生との関係」に満足していないほど、「早く大人になりたい」割合が高くなる。学校の先生との関係は次にみる中・高校生の傾向に通ずる部分もあるが、どちらかといえば、今の自分や社会に満足していると大人になりたいのである。

高校生は、「家族との関係」「学校の先生との関係」「自分が通っている学校」に満足していないほど、「早く大人になりたい」割合が高くなる。中学生は、これに「現在の自分の成績」「自分が住んでいる地域」も加わる。つまり、中・高校生では、現在のまわりの人間関係や環境に満足していないほど大人になりたいと思ひ、逆に現在に満足していると大人になりたいと思わないのである。

## ◆高校生では大人の世界に身近なほうが

## 「早く大人になりたい」と思う

他にも、大人になることに関係しそうな項目として、「将来になりたい職業」があるかどうか、アルバイト経験（高校生のみ）、現在親が「あなたのことを大人として扱ってくれる」かどうか、

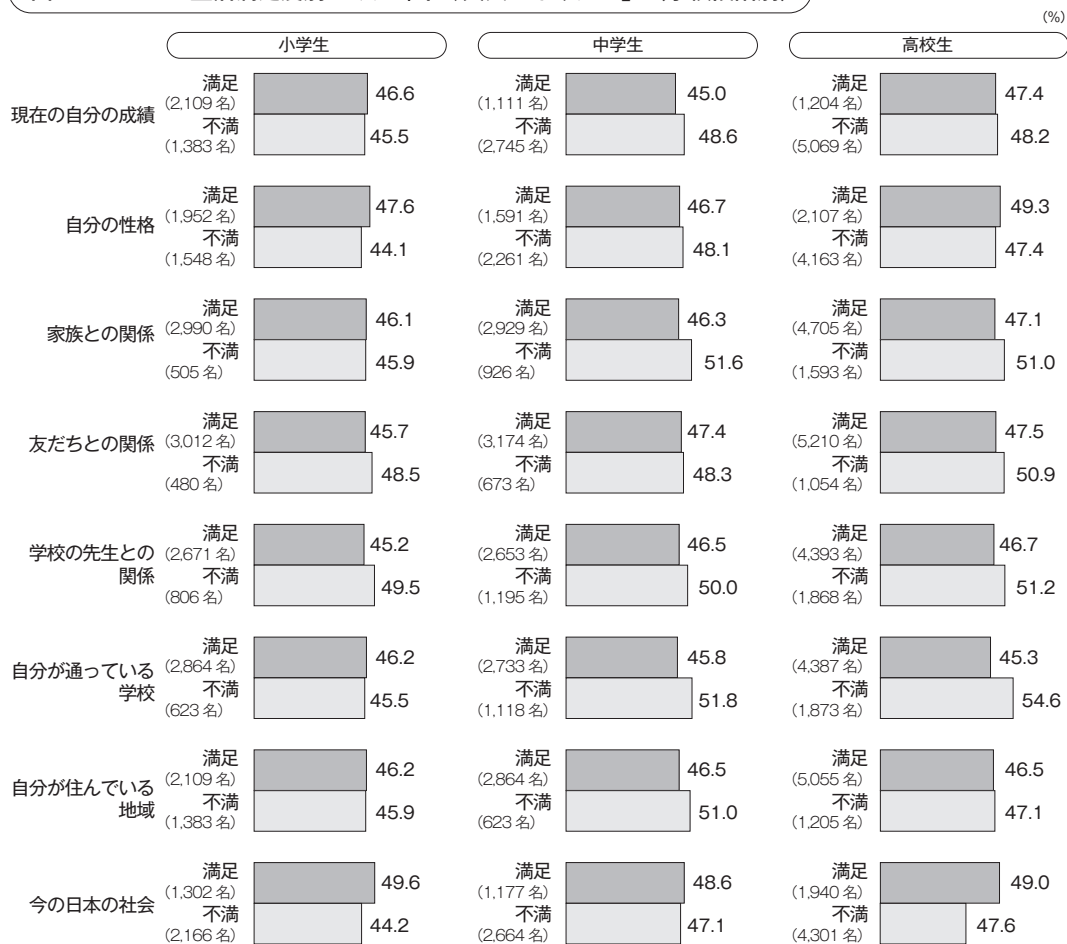
地域別、成績（小・中学生）・高校偏差値層別（高校生）も確認した（表4-1-4）。

「早く大人になりたい」と答える割合が3ポイント以上高いのは、小・中・高校生を通してやりたい職業があるほう、高校生でアルバイト経験があるほう、小・中学生で親が大人として扱ってくれるほう、小学生と高校生で大都市より中都市や郡部のほうである。小・中学生の成績は関係しないが、高校生では進路多様校>中堅校>進学校の順に大人になりたい率は下がる。

なりたい職業は、小学生のころはいわゆる「夢」であるが、高校生ごろから急速に現実味を帯びてくる。同様に、「大人として扱う」の意味も学校段階で変わってこよう。先の分析と合わせて考えても、小さいころは、地方に住んでいる子ども、親に尊重され自信が持てている子どものほうが大人になりたいということであろう。

高校生となると、実際に大人に混じり、現実的な意味で職業希望があるほうが大人になることを希望している。ただ、高校偏差値層別では進路多様校ほど、また地域別では大都市や郡部ほど、「早く大人になりたい」と思っているという結果である。これらは現在の生活に不満を持ちやすい層である（本節第1項参照）。現在に不満を持ちながらも、すでに実質的に大人に近い生活を送っているほど、「早く大人になりたい」のである。ということは、この層は進学重視の風潮のなかで意思に反して学校生活に留め置かれているともいえる。逆に、都会の進学校の生徒が、「大人になりたい」と思いづらいのも気にかかる。

図4-1-10 生活満足度別にみた「早く大人になりたい」（学校段階別）



注1) 「早く大人になりたい」で「とてもそう」+「まあそう」の%。

注2) 各項目について、「とても満足している」+「まあ満足している」を「満足」、「あまり満足していない」+「ぜんぜん満足していない」を「不満」とした。

表4-1-4 「早く大人になりたい」の諸要因（学校段階別）

		小学生	中学生	高校生
将来なりたい職業	ある	49.7	52.5	51.6
	ない	38.8	40.1	43.2
アルバイト（高校生のみ）	現在、している	—	—	56.2
	したことはあるが、現在はしていない	—	—	55.0
	したことがない	—	—	46.1
親が大人として扱ってくれる	はい	51.4	50.9	49.8
	いいえ	43.5	45.7	46.9
地域	大都市	41.8	46.3	39.9
	中都市	46.4	45.7	51.1
	郡部	47.0	47.9	51.7
成績（小・中学生のみ）	上位	45.6	45.7	—
	中位	45.5	46.5	—
	下位	45.9	47.7	—
高校偏差値層（高校生のみ）	進学校	—	—	41.9
	中堅校	—	—	50.7
	進路多様校	—	—	54.9

注) 「早く大人になりたい」で「とてもそう」+「まあそう」の%。